

# 忍者表象のグローカリゼーション： ナリウッドにおけるソッコト忍者

中 村 博 一

## Glocalization of Ninja Representation: Sokoto Ninja in Nollywood

Hirokazu Nakamura

Ninja is said to be the ancient warrior originated in Japan. Nowadays its transnational emerging has been seen globally, even in Sokoto, northern Nigeria where I have conducted field research for Nollywood kungfu film since 2001. In this article, I trace some transnational process of ninja representation outside Japan and consider ways to transform global image into a localized ninja/ninjoji of Sokoto.

「それは近年の現象で、戦前まで忍者と  
いうことばは一般に用いられなかった」  
足立巻一<sup>1</sup>

### はじめに

世界のある場所で生起する現象がひどく離れた別のところでもうひとつの事件を引き起こす。そんな現象や事件が世界各地で見られるようになった。そうした事例を学ぶうちにかえって本家あるいは元祖のイメージが揺らぐことがある。わたしにとって忍者はそのひとつである。

---

<sup>1</sup> 足立巻一1980『立川文庫の英雄たち』文和書房、204頁

10年近く北部ナイジェリアのビデオ映画を集めてきた。調査で滞在する度にVHSとVCDを購入している。しかし、物理的に見られないものや非常に粗野なつくりのものが多い。ビデオの状態がひどく画像が乱れ切れる、ハルマッタン風の中の撮影で台詞がかき消される、ストーリーがひどいのか編集がひどいのかわからないまま突然砂の嵐でブラックアウトなど、ナイジェリアと出会って以来、常にすべてにわたりそうであったように期待は萎え幻滅が連鎖し疲労が蓄積していく。そんなある日、忍者が登場する作品と出会った。サバンナや森の中に突然忍者が現れ人々を襲い手裏剣を投げつける、形勢が不利と見るやぱっと消え失せ、とまどう相手の前で今度は不意打ちを食らわせるのだ。インド映画ゆずりの恋愛ストーリーを予想していたわたしのショックは大きかった。ナイジェリア人がナイジェリア人のために忍者を演じているのだから。実は同じ頃コンゴ共和国では忍者事件が起こっている。2002年英国BBCはこの忍者にからむ司祭誘拐事件を大きく報じ、次のように当事者を表現している。「忍者は、1990年代のコンゴ・ブラザビルの内戦における民兵組織から分かれた集団であり、古来の日本戦士にみずからをなぞらえている。その指導者は神秘的なカルト的存在であり、司祭ントミと自称する」<sup>2</sup>。わたしの胸は高鳴った。アフリカの忍者とはいったい何者であるのか、そしてどこからやってきたのか。

この小論では日本から遠く離れたアフリカにまで越境した忍者の姿を簡単にたどり、調査地である北部ナイジェリア、ソッコトのビデオ映画における忍者について報告してみたい。

---

<sup>2</sup> <http://news.bbc.co.uk/2/hi/africa/2286263.stm> (2005/10/17DL)

## アフリカン・ビデオカルチャー

現代アフリカにおける大衆文化とは何かと問われたらビデオ映画を落とすことはできないだろう。1980年代以降機材が普及し、身近になったことを背景として、90年代はじめアフリカ人によるアフリカ人のための大衆ビデオジャンル、新たな社会文化空間、ビデオ産業が生まれた。その中心地はナイジェリアとガーナである。わたしは88-9年にかけてナイジェリア北部のソコトで生活しており、大衆メディアがこうしたビデオ産業化へ至る直前の状況を経験している。当時の北部ハウサ語圏は大衆小説（市場本、恋愛本）が次から次へと生みだされていた。書く側も読む側も二十歳前後の若者たちであった。ハウサ語大衆文化を専門とする著名な研究者もこうした小説がどこから出来し、どこへ向かうのかきちんと見すえることはできなかった。その後これら若者たちは、大衆ビデオのシナリオライターや視聴者に変貌することになる。

近年ナイジェリア全土でつくられるビデオ映画は大変な数にふくらみ、5年ほど前からはハリウッドと総称されている。様々な資料でよく目にするのは年間製作2400本、アメリカ映画（ハリウッド）を凌駕し今やインド映画（ボリウッド）に迫る勢いだとされている<sup>3</sup>。ハリウッドはナイジェリアの3大言語である Yoruba 語、ハウサ語、イボ語、そして英語でつくられている。イボ語の作品についてはよく言われるように英語への志向が強いため数は非常に少ない。Yoruba 語圏、ハウサ語圏ではそれぞれの言語の作品が圧倒的である。

90年代よりはじまるナイジェリアのビデオ文化はビデオ機材の大衆的普及、つまりグローバルな産業・流通システムの産物とみることができ。しかしその前に、写す中身であるソフト面は映画館やテレビでの視

---

<sup>3</sup> <http://www.guardian.co.uk/film/filmblog/2010/sep/21/nollywood-nigerian-film-industry> (2010/12/21閲覧)

聴という行為のなかで長らく、広くそして深く記憶され熟成・再想像された実践に由来する。

さて本稿が扱う忍者については、北部のハウサ語ビデオだけに限定しても、さらに現地のサポートをえたとしても全貌をあきらかにするのはなかなか困難である。ユネスコによればナイジェリアのビデオ映画の24%がハウサ語でつくられる<sup>4</sup>。とすると年間500本、この膨大な数をカバーするのは容易でないからである。

そこで調査のなかで出会い、関係をつくってきたソッコト市のビデオ映画プロダクションおよびその作品を取り上げることとしたい。とはいっても彼ら自身競合する相手がいないと従来語ってきているため、北部ビデオ産業の中心地であるカノやカドゥナで探すことを当面考えなくてもいいのかもしれない。そもそもハリウッドにおいて忍者の作品をつくっていること自体が驚きであり、それはこの小論の導因ともなっているのだから。

## ソッコト

ソッコトはナイジェリア北西部に位置するソッコト州の州都、ニジェールとベナン国境に近い地方都市である。越谷が話題となったようにここで働く外来者はナイジェリアで一番暑いところだとソッコトを嫌う。もっとも西アフリカ史においては19世紀はじめのジハード以後、広大な封土領の中心となる重要拠点として周辺諸国にもその名は聞こえている。6年前にはジハード200年を祝う式典が行われた。北部ナイジェリアの百万都市カノには全くおよばないものの、カドゥナや北東部のマイドゥグリなどとともにより北部を代表する町である。

---

<sup>4</sup> [http://www.uis.unesco.org/ev.php?ID=7651\\_201&ID2=DO\\_PRINTPAGE](http://www.uis.unesco.org/ev.php?ID=7651_201&ID2=DO_PRINTPAGE) (2010/5/1閲覧)

このソコトでなぜ忍者の作品がつくれるのか。複数の考え方ができるように思う。カノから遠く離れた地であること。同じハウサ語圏であっても言語文化についてはカノに対する対抗意識、自分たちはもうひとつのハウサだという意識をもっている。つまりカノのようなパワフルな文化センターに吸収されない独自の位置があり、独自の展開が可能だった。また、マーシャルアーツに対する関心が高く、数十年前より、柔道・空手等を含む同好会的な集団がいくつも組織されてきた。その中には「スーパー忍者」という名の組織も含まれる。そしてポスターや街頭パフォーマンスによって自分たちの「アーツ」を表現したい欲望があったことも考えられる。

ところで日本の忍者イメージがアフリカやナイジェリアに到達するまでどのような軌道を想定できるのだろうか。それには忍者のグローバル化を考えなければならない。

### 越境する忍者

忍者はいつから海外で知られるようになったのか。まず発信源の日本から考えてみよう。日本における忍者（忍術）ブームは文化文政期を含めこれまで何回か確認されている<sup>5</sup>。マンガ・テレビ・ゲームなど多様なメディアにおいて忍者が頻繁にあらわれる現在もまた何度目かのブームと考えることができる。

戦後の昭和30年代に時代小説が流行した際も、忍者は題材のひとつとなり、映画やテレビシリーズによりブームが加速された。忍者ごっこ  
の果てに子どもが死亡する事件が多発したのもこの頃である<sup>6</sup>。忍者と

---

5 足立1980、128頁

6 1964年前後の新聞記事検索で当時のブームの一端がうかがえる。

いう表現自体は実はこの時代以降に普及したものとされている<sup>7</sup>。この昭和30年代のブームにおいては忍者研究書や解説書も同時に出版された。そのひとつに『忍者の生活』（1963年初版）がある。著者山口は増補版の中で『ニューズウィーク』の記事について述べている。「外人が書いた日本忍術観としては、初見のもので見方がおもしろい」<sup>8</sup>。山口が参照したのは『ニューズウィーク』の記事そのものというよりも、『文藝春秋』に掲載された抄訳「忍者ブーム」である。「幼児からお祖父さんまで風靡」した忍者ブームを社会的事件、歴史、さまざまな忍術、忍者の末裔へのインタビュー、山田風太郎の影響など多様な側面からこの抄訳は分析している<sup>9</sup>。

当時の『文藝春秋』には「日本の評判」というコラムがあり、日本をめぐる世界各誌の記事を紹介していた。「忍者ブーム」の前後は日ソ貿易や「新しい顔を作る日本外科医」についてであり、編集部の辛口のコメントがそれぞれついている。こうした記事からはオリンピックが開催される日本の海外イメージをずいぶんと気にしていたことがうかがわれる。「忍者ブーム」については、単に「ナンセンスとエロチシズムと残虐さのカクテル」とブームを片づけてしまえるのか、外国人のまとめ方に疑問を呈している。今この記事を読むとこの「カクテル」が山田風太郎の小説群を指しており、忍者ブーム自体ととらえるのが誤読なのは明らかである<sup>10</sup>。ともかく早い段階での海外の忍術観が忍者の商業化を嘆く「純粋派」の（あるいはエッセンシャル主义的）忍者とメディアに媒

<sup>7</sup> 足立1980、203頁

<sup>8</sup> 山口正之1969『忍者の生活（増補版）』雄山閣、288頁 初版にはこの記述はない。

<sup>9</sup> 『文藝春秋』1964年10月、282-3頁

<sup>10</sup> また抄訳では「現在日本で販売されている忍者に関する本二万種のうち、四分の三は純粋におとな向きである」として忍者小説王山田風太郎が紹介されている。『ニューズウィーク』では二百種となっており、忍者についての書籍の多さを印象づけたいがための意識的な誤訳かどうかはわからない。いずれにしても非常にセンセーショナルな書き方がされている。

介された「カクテル」=フィクショナルな忍者をとともに含み込むような忍者ブームとして書かれているのが興味深い。

この抄訳からは落とされているが、もとの『ニューズウィーク』の「うまいカクテル」と題された記事は、イアン・フレミングの『007は二度死ぬ』を強く意識したものだ<sup>11</sup>。「九州にある恐ろしい死の城郭にジェームズ・ボンドはどう潜入するのか」「もちろん日本人がすすめる忍者の装束である」「西欧では知られていない忍者（忍び込む者）は、多くの日本人にとり、ロビンフッドやスーパーマン、魔術師マンドレイクが合わさったものなのだ」「忍者はまた、映画やマンガやテレビによって、流行が起きやすい日本にハマッタ最新の流行なのである」<sup>12</sup>。そして1967年映画化された『007』が公開されることとなる。『007』の現代的忍者は海外での最初のイメージとなったと思われる。なお「うまいカクテル」では超能力や魔術との関連で忍者が語られているが、こうした連想は今日まで忍者のイメージにあり、アフリカまでも再生されていくことになる。

この『007』から3年後、英文での忍者解説書『見えない暗殺者』が出版される<sup>13</sup>。本書は欧文によるおそらくごく初期のものである。著者アダムズはジャパントイムスの元記者で「日本の外で忍者はほとんど知られていない」<sup>14</sup>とし、忍者について世界の人々に関心をもってもらうためその生活と時代について書いたと述べている。「この不吉なスパイ活動専門集団に関する真実の生活の功績は、ジェームズ・ボンドのような空想のスーパーエージェントについて考案されたいかなるものにも劣

---

<sup>11</sup> *Newsweek* August 3, 1964: 25-6

<sup>12</sup> 前掲書25頁

<sup>13</sup> Adams, A. 1970 *The invisible assassins*. Ohara Publication

<sup>14</sup> 前掲書21頁

らない」<sup>15</sup>と実在した真実の忍者を強調する。いわば純粋派の解説書として書かれたものだ。

序文には甲賀忍者の滋賀の甲賀の位置を茨城県古河と誤った（と思われる）地図が載っており、忍者についての知識が乏しい海外の状況がうかがえる。また本書は東京オリンピックから間もない時期の執筆のためか、忍者とトレーニング方法についても触れている。「東京オリンピックのチームは忍者トレーニング法により大変印象的で本当にそのいくつかを利用していただと考えられた。」<sup>16</sup> 厳しい教育で有名な古代スパルタ方式と忍者の生活や訓練を比較しようと試みている<sup>17</sup>。

#### 空想化した忍者と海外のブーム

このように40年前に海外で認知度の低かった忍者は、『007』や東京オリンピックをきっかけに知られるようになり解説書まで出版されるようになった。では今日ではどのような認識になっているのだろうか。

2003年に出版されたターンプルの忍者史『忍者：1460年－1650年』はその後の状況を端的に示してくれる<sup>18</sup>。「忍者ほど世界史においてよく知られ、にもかかわらずひどく誤解されている軍事組織はほとんど存在しない。」そのため忍者というテーマで書くのは大変なのだと言っている<sup>19</sup>。

このターンプルの指摘は何を意味するのだろうか。前出の表現を使えば「純粋派」とフィクションとしての忍者、この両者は戦後日本の忍者ブームでも存在したし、また今日でも存在し忍者を支えていると言って

---

<sup>15</sup> 同書25頁

<sup>16</sup> 同書91頁

<sup>17</sup> 残念ながら東洋の魔女が忍者と関連があるかどうか語られていない。

<sup>18</sup> Turnbull, Stephen 2003 *Ninja AD 1460-1650*. Osprey Publishing

<sup>19</sup> 前掲書4頁

いい。ただその境界が曖昧なことや「純粹」とフィクションの往還が誤解をさらに深めているとも言えることができよう。海外の資料を検索して少々驚くのは忍術の実践書の多さである。これは日本語資料が小説をはじめとするフィクションと忍者の歴史書・解説書でほぼカバーされるのと対照的である。空想化された忍者が海外でリアルな存在として関心が高まった結果、実践書の出版につながったとも考えられるが、その実践書にしても世界的に知られた忍者初見良昭関連の資料からアシダ・キムのような空想化された忍者の実践書まで非常に幅広いのである<sup>20</sup>。『ニューズウィーク』が指摘したように空想や誤解があつてこそ忍者という現象はブーム化したのだと考えられる。ぱっと消えたり、飛び上がったり超能力や魔術的なフィクショナルな側面がなければこれほどグローバル化しなかったのではないだろうか。その点しばしばナチュラルと形容されるカンフーと忍術は大きく異なるだろう。

このような忍者イメージまでにそれほど「よく知られ」「ひどく誤解」させた要因としては、忍者をめぐるメディア文化の隆盛が考えられる。そのひとつとしてアメリカの映画・テレビにおける忍者ブームをあげることができよう。

『007』以後も忍者が登場する洋画はつくられていく。艦上で忍者が死闘を繰り広げる『キラエリート』(1975)や兄弟の因縁と忍者を含むテロリスト集団を描いた『オクタゴン』(1980)はその例である。しかし忍者ブームに火をつけたのは、エリック・ラストベーター<sup>21</sup>の小説『ザ・ニンジャ』(1980)のベストセラーに続く、映画『燃えよ忍者』(1981)の大ヒットとするのが定説である。ショー・コスギ、リー・バ

<sup>20</sup> 例えばKim, Ashida 2000 *Ninjutsu for women: ninja secrets of defensive fighting*. Citadel Press. 特に、xiii-xivの空想的な「くのいち」の歴史記述を参照。

<sup>21</sup> 現在はラドラムのジェイソン・ボーンシリーズの原案を書いていることで有名である。

ン・クリーフ、マイケル・ダディコフといった名優はこの時代忍者とともに記憶され、多くの映画・テレビシリーズがつけられた。そのブームのすごさは開発中の日本製二輪車にNinjaの名前が与えられたことからもうかがい知ることができる。設計者は言う。「Ninjaというペットネームはアメリカ販社のアイデアでした」「ちょうどアメリカで忍者ものの番組をやっており、知名度があったことでNinjaと名づけたんですね」<sup>22</sup>。そして忍者バイクは新たな領域で大ブームを生みだす商品となった。

ここで注目すべきはこの忍者ブームがアメリカに留まらなかったことだ。香港映画、インド映画においても実に多様なそして多くの忍者映画がこの80年代に製作され、世界中の映画館で上映されることになる。

#### 北部ナイジェリアにおける忍者

ではナイジェリア北西部の地方都市ソッコトで忍者はどのように現れたのだろうか。わたしの経験からはじめよう。アフリカにおけるパワフルな大衆メディアといえばラジオである<sup>23</sup>。最新の世界情勢から地域の話題まで識字率に関係なくリアルタイムに知ることができる。この状況は昔も今も、そして北部ナイジェリアでも変わらない。はじめてのナイジェリア滞在中、時間があるときは地元ラジオ局リマ・レディオ・ソッコトをよく聴いていた。ニュースやお知らせの合間に音楽が流れ、マイケル・ジャクソン、ボブ・マーリー、ハウサ音楽の著名なマーマン・シャーター、イッロン・カルゴ、インド音楽等々、実に多様な曲を聞くことができた。80年代末のことだ。この地で最初に忍者を知ったのは実

<sup>22</sup> <http://www.kawasaki-cp.khi.co.jp/ninja/index.html#/first/1/page4> (2009/11/12閲覧)

<sup>23</sup> Fardon, R. and Furniss, G. eds. 2000 *African broadcast cultures: radio in transition*. Praeger Publishers; Bourgault, L. M. 1995 *Mass media in sub-Saharan Africa*. Bloomington: Indiana University Press; Tudesq, André-Jean 1998 *Journaux et radios en Afrique aux XIXe et XXe siècles*. Gret等参照のこと。

はこの時間であった。「忍者」という台詞の入ったインド映画音楽が流れていたのである。

当時のソッコトには衛星放送やケーブルテレビはなかった。ビデオの普及も今日ほどでなく、映画が娯楽の中心であった。そして映画館へ行かないと映画は見られなかった。わたしもまた大学の友人に何度も誘われたことがある<sup>24</sup>。映画館は繁華街のノーザンシネマとサバンナに近い道沿いのソッコトシネマの2館があった。カノ同様ソッコトでも昔からインド映画、香港映画、ハリウッド映画がかかっていた。平日はインド映画、週末が香港映画とアメリカ映画の組み合わせであった<sup>25</sup>。

インド映画は上映の肝であり、北部ナイジェリアの現代文化に大きな影響を与えている<sup>26</sup>。80年代末のハウサ語大衆小説の出現そして90年代半ばからの北部ビデオ文化の開花をインド映画のハウサの受容とするのは今や常識となっており、その先駆的研究を行ったラーキン「もうひとつの」ではなく「並行的」近代という表現を使いインド映画の視聴による北部の新たな結婚観やモラルティの生成を分析している<sup>27</sup>。

おそらくこうしたインド映画の上映において忍者が見られ、ラジオから偶然わたしが耳にすることとなったのだろう。残念なことに女性の声でやさしく「忍者」と歌われるその曲がどの作品からとられたのか今もわからないが、80年代のインドの忍者映画で有名なものをひとつだけあげておこう。チャクラボーティ主演の『コマンド』（1988）、これはダ

<sup>24</sup> 北部ナイジェリア、カノにおける映画館の位相については以下を参照のこと。もともと映画館が少ないソッコトでは、ラーキンのようなコスモロジカルな明示は難しいが、若者の日常に欠かせない娯楽の場であった。Larkin, B. 2002 The materiality of cinema theaters in northern Nigeria. In Ginsburg, F. D. et al. eds. *Media worlds: anthropology on a new terrain*. University of California Press. pp.319-36.

<sup>25</sup> 後述の武術兼俳優学校のマスタ、アフマドによる。

<sup>26</sup> とはいっても観客はほとんど言葉を理解しなかった。Larkin, B. 1997 Indian films and Nigerian lovers. *Africa* 67(3): 406-40. を参照のこと。

<sup>27</sup> *ibid.*

ディコフの『アメリカン忍者』（1985）<sup>28</sup>の剽窃というか翻案である。殺された父親の敵討ちと敵方の娘との恋愛がストーリーラインを構成するが、シリアスな展開の中で突然ダンスと歌がはじまるというインド大衆映画の正しい文法にしたがう作品である。『コマンド』は数年前にソッコトのローカルテレビで放送されている。映画館でのインド映画の視聴が不可能になった今もインドの忍者が見られる好例となろう。

長年娯楽の中心であった映画館はイスラム法シャリーアの導入後この10年足らずの間に閉鎖されていった。ノーザンシネマは政党の事務所となり、ソッコトシネマはモスクに改築された。しかし映画館がなくなったとはいえ様々な視聴行為を目にすることができる。市内のレストランやビデオショップに行けば一日中インド映画が放送・視聴されているし、家庭でもナイルサット他の放送衛星によって様々なチャンネルを視聴できる。メディア環境は極めて短期間に大きく変わったと言えよう。またこうした通信環境がない家庭でもVHSやVCDの安価なプレーヤーの普及によってビデオ映画の視聴ができる。物売りの少年にたずねてみると、すぐに『ポケット忍者』<sup>29</sup>のVCDを見せてくれた。ハード・ソフトとも中古市場は豊富である。レンタルによる視聴も可能となっている。一方、近郊農村でのテレビの視聴は電気の問題があるため各家庭においては厳しいが、有力者が上映会を開き子どもたちを招く場合もある<sup>30</sup>。このように映画の視聴とその一部としての忍者イメージの消費は、映画館の閉鎖をものともせず、なにくれとなく続いていると言えよう。

<sup>28</sup> 『アメリカン忍者』はアメリカの忍者ブームをつくったシリーズにつらなる作品で、元日本兵に忍術を学んだヒーローが活躍する。

<sup>29</sup> IMDB上の『ポケット忍者』（1997）と同じかどうか不明。現地では海賊版が多い。

<sup>30</sup> VCDの上映会は原則的に禁止されている。

### ソッコトのビデオ製作者の忍者

こうした視聴行為はまた忍者をビデオ映画に登場させる地元のプロダクションにとっても身近なものである。わたしが調査対象としているのは、2004年よりカンフーや忍者の映像を生みだしたSプロダクションである。この組織については別稿で詳述するが、概要を述べるなら、ビデオ映画のプロダクションでありながら昇段システムをもつ武術兼俳優学校でもある。メンバーには国境の近いニジェール人も含まれるが、ほとんどがソッコト周辺出身である。中心となるディレクター・カメラマン・指導者は40代から50歳前後、マスタと呼ばれている。映画産業従事者の全国組織MOPPANに所属し、さらにはソッコト州内の映画業界にも深くかかわっている<sup>31</sup>。今のところ専従者はおらず、公務員や会社員が大半である。

彼らの多くが少年時代に映画館でカンフーや忍者に触れた世代である。忍者が日本と関わることはよく知っていてニンジャやジャパニスという名をもつメンバーがいる。おもしろいのは先述のインド映画というより週末の香港映画、彼らの表現では「チャイニース」を狙って映画館に通ったということである。

記憶に残っている忍者映画をたずねると、『少林拳対五遁忍術』（1982）と『龍の忍者』（1982）という答えが返ってきた。いずれも香港映画であり、前者はカンフー映画の老舗ショーブラザース作品である。対立するカンフー党派が助人として日本の武士を呼ぶところからはじまる。武士が負け切腹したため、友人の忍者が組織を率いて復讐する。主人公は恩師や仲間を殺されながらも忍者と死闘を繰り広げ勝利する。この作品

---

<sup>31</sup> 例えば地元紙『ハンツィー』（朝の意）は2005年8月ソッコト州映画業界の重鎮とした上でマスタのひとりアルコ氏に本業界の展望についてインタビューしている。詳細は“Neman ci gaba ya sanya na tsaya takarar Shugaba” *Hantsi* (Agusta, 2005) 参照。

では忍者は悪役であり、金・木・水・土・火と「五遁」をもちいて襲いかかる。中国と日本が空間的・時間的に混ぜ合わされ、空想的な設定と忍術の奇抜さがわれわれにとっても興味深い。後者は真田広之とコナン・リーの共演が話題を呼んだ。敵対していた忍者とカンフーの名手が力を合わせて敵を倒す。日本と中国の関係はやはり奇妙に思えるが、忍者はヒーローのひとりである。

こうした海外の映画以外には忍者やカンフーの資料とほとんど接点がなかった彼らは過去には映画館、現在はVCDで忍者に出会い自らの忍者を生みだしている<sup>32</sup>。忍者については一様に身を隠す（遁術）点を強調する<sup>33</sup>。そしてそれはよくないことだと言う。あまりいい意味では語られない。

### ビデオ映画における忍者

では彼らの作品で忍者はどのように描かれているのだろうか。いわば越境した忍者を見た人々が想像（創造）化した忍者である。Sプロダクションは10年前に映像を撮りはじめ、資金難に苦しみながらも、2007年までに7本の作品を生みだした<sup>34</sup>。彼らの作品において忍者が登場するのは『訪問』『守護』『真実の光』である。

『訪問』（2004）は昔カンフーを学んだ弟子が恩師に託された責任を果たすために集い、忍者と戦うというストーリーである。『守護』（2005）は父親を裏切り殺した親友が忍者であり、父の財宝で豪華な生活を営む。その忍者を貧しい息子が討つ設定になっている。『真実の光』（2007）は妻子を殺された秘密諜報員が上司に復讐するという設定である。

これら3作品では忍者が裏切り者や悪の手先であるという点が共通し

<sup>32</sup> ナイジェリアでは3年前から中国武術が学べるようになった。

<sup>33</sup> ハウサ語ではb'oye「隠す」。

<sup>34</sup> その後、女優のスキャンダルを発端とする製作禁止期間を経て現在も製作は続いている。

ている。イスラムの教えに反するような拝金・飲酒・密輸・武器売買・売春といった反社会的世界に忍者はつながっているのだ。先述したようにSプロダクションのメンバーは香港映画に親近感をもっている。カンフーの使い手と忍者の戦いが見せ場になっているが、忍者は非常に強く、普通のやり方では倒れない。ぱっと消えて逃げおおせるし、特殊な術を使うからである。そういう忍者に対抗する手段として出てくるのはコーランの護符やイスラムの祈りである。ピンチに陥ったヒーローはこうした手段を使ってついに忍者に勝利する。香港映画においては少林寺と忍者の対立をよく目にするが、Sプロダクションの作品は少林寺ないしは仏教の部分がイスラムの教えや祈りに変換されているとも読める<sup>35</sup>。正しいイスラム教徒とカンフーの結びつきは随所に見られる。忍者は対極的な配置となる。

また忍者は黒・赤・金の装束で登場する。金が一番強い忍者、赤は黒忍者を束ねている。特に金色忍者（役柄としてはゴールデンニンジャ）については『少林拳対五遁忍術』のような香港映画の影響と考えられるが、黒と赤についてはハウサ語圏の色分類が関わっているとも考えられる。ハウサ語圏の文化を研究する者にとってボーリーという憑依現象はなじみのあるものである。目に見えないイスカ（人格霊）が人に乗りうつり、病や災厄を引き起こすという思想は広く見られ、5年ほどまえに市内の大市場が全焼した火事についてもイスカの住処であった大木を切り倒したからだと噂されたのだった。ボーリーの民族誌にはイスカを祓うための治療儀礼プロセスが報告されている<sup>36</sup>。人に憑いたイスカを黒色で表し、赤色で祓い、白色の善いイスカに変換するというものであ

<sup>35</sup> 最近製作中の『アハマディヤー』ではシャカ（釈迦）が悪の組織のボスという設定になっている。しかし、イスラム対仏教という図式を考えているのではないようだ。

<sup>36</sup> 例えばMonfouga-Nicolas, J. 1972 *Ambivalence et culte de possession*. Anthropos.

る。このような色分類を具体的に目にし確認する機会はありませんが、黒や赤についても海外映画の流用というだけではなく、現地のロジックが使われている可能性を無視できない。

## おわりに

ハリウッドの特徴やこれほどの本数がつくられるようになった理由を聞かれたことがある<sup>37</sup>。それまで頭の中でしかイメージできなかったことが特殊効果によって表現できるようになった点を強調した。10月にロンドンで開催されたナイジェリア映画祭「ハリウッド・ナウ！」のディレクター、フェニックス・フライもまた、ハリウッドの多くは伝統信仰がナイジェリアの主要宗教であるイスラム教やキリスト教と共存する様子に注目し、簡単なビデオ効果を用いて見事におばさんを悪魔に変身させ、邪悪な動物霊を祓うのを見せていると述べている<sup>38</sup>。これまで述べてきた忍者は、こうしたハリウッドの条件にぴったりあてはまると言えるだろう。拝金主義の蔓延や貧困の遍在等々、ソッコトの現実の目に見えない邪悪な何かをハリウッドの忍者は視覚的に埋め合わせているのだ。とするなら江戸の昔に幻術と呼ばれフィクションの世界に追いやられた怪しげな忍術は、現実の一部として呪術が存在し続ける現代アフリカでこそ生き生きとよみがえったと言えるのかもしれない。

エンターテインメントと現実の生活は違うと厳しいことばをいただくこともある。ビデオ映画は表層的にしか解決をもたらさない、これも地元の研究者からいただいたことばだ。しかし、ソッコトの忍者ビデオには忍者映画の視聴経験だけでなく、彼ら自身の現実の生活や理想、世相観、文化観が複雑にからみあうのが見え隠れするのである。

<sup>37</sup> 『地球アゴラ』のスタッフに意見を求められた（2010年5月）。

<sup>38</sup> 脚注3のURL参照、および、<http://www.nollywoodnow.co.uk/>